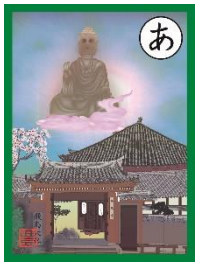
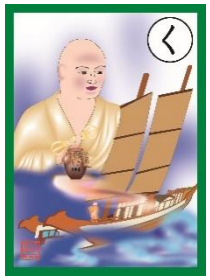
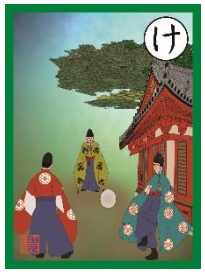
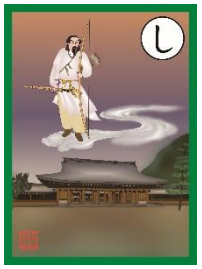
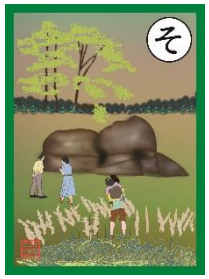
奈良まほろばかるた

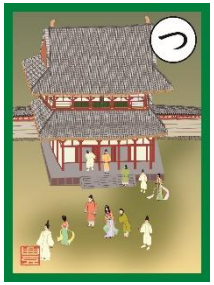
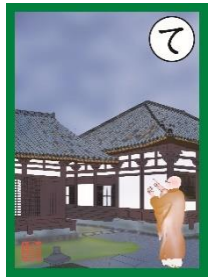
―絵とかるた文・解説文―

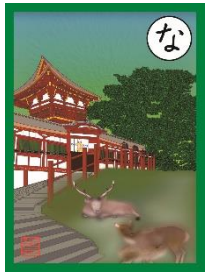
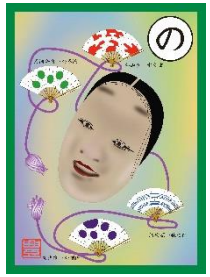
NPO 法人「奈良まほろばソムリエの会」

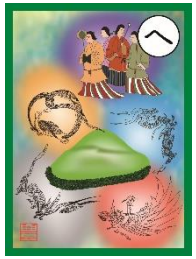
	絵	読み札＜表面＞	読み札＜裏面：解説文＞
あ		あすかでら にほんでいちばん ふるいてら	**飛鳥寺日本で一番古い寺** 飛鳥寺は、蘇我馬子が１４００年以上前の推古天皇４年（５９６）に建てた日本で初めて金堂や塔がある本格的なお寺です。建てられた当時は法興寺と呼ばれていました。 推古天皇１７年（６０９）に鞍作止利が作った銅造の仏像がまつられました。この仏像は、飛鳥寺の本尊で飛鳥大仏とも呼ばれ、日本で一番古い仏像です。高さは約２．８㍍あります。
い		いちねんの はんぶんあめの おおだいがはら	**一年の半分雨の大台ケ原** 大台ケ原は、吉野郡上北山村と三重県の境にある台高山脈の南の端にある標高１５００㍍前後の台地で、吉野熊野国立公園に属しています。年間に降る雨の量は５０００㍉を超えることがある日本でも指折りの雨の多い地帯です。 原始林が茂り、カモシカやクマ・サルなどの野生動物も多く棲んでいます。
う		うみのない ならでうまれた かきのはずし	**海のない奈良で生まれた柿の葉寿司** 吉野や五條などに伝わる柿の葉寿司は、紀州（今の和歌山県）から山を越えて運ばれる塩サバを酢をまぶした飯に乗せ、柿の葉で包み、押し寿司にしたものです。 奈良県には海がなく、昔は生の魚は手に入りにくかったので保存ができる塩サバを利用したのです。かつては、各家庭でいろいろな行事の時に作られていました。
え		えんのぎょうじゃ ならごせうまれの しゅげんそう	**役行者奈良御所生まれの修験僧** 薬師寺のお坊さんが書いた『日本霊異記』に、修験道（山伏で知られる密教の一派）を初めて開いた役行者は今の御所市茅原で生まれたと書かれています。役行者が生まれたといわれる所には、現在、吉祥草寺が建てられています。 役行者が開いたとされるお寺には、金峯山寺・龍泉寺・大峯山寺などがあります。
お		おだけとめだけ おおつのみこがねむる にじょうざん	**雄岳と雌岳大津皇子が眠る二上山** 二上山は葛城市當麻と大阪府太子町にまたがる山で、雄岳（標高５１７㍍）と雌岳（４７４㍍）の二峰からなります。古代の人々は二峰を男女の二神に見たて「二神山」とも呼んでいました。 飛鳥時代に謀反の罪で処刑された大津皇子が雄岳山頂に埋葬されたとも伝えられ、姉の大伯皇女が二上山をわが弟といった歌が『万葉集』にあります。

か		かえるとびぎょうじ せかいいさんの きんぷせんじ	**蛙飛び行事 世界遺産の金峯山寺** 金峯山寺は、役行者が建てたお寺で、修験道で一番大事なお寺とされています。役行者が金峯山を本拠地として修験道に励み、山岳信仰を広めたと伝えられるため、修験道の聖地となっています。 毎年７月７日に行われる蓮華会には着ぐるみの蛙が登場、「蛙飛び行事」の名で知られています。 金峯山寺は、平成１６年（２００４）「紀伊山地の霊場と参詣道」で世界遺産に登録されました。
き		きょだいな やよいじだいの からこかぎいせき	**巨大な弥生時代の唐古・鍵遺跡** 唐古・鍵遺跡は、奈良盆地のほぼ中央の田原本町唐古から鍵にかけて、河川によって運ばれてきた土砂が堆積した標高４８㍍前後の土地にできた弥生時代の環濠集落遺跡です。 遺跡の範囲は、南北約８００㍍、東西約６５０㍍、面積約３０万平方㍍と推定され、国内でも指折りの弥生時代の集落です。また、集落は直径約４００㍍の大環濠で囲まれていました。
く		くうかいが つたえたという やまとちゃ	**空海が伝えたという大和茶** 大和茶は、大同元年（８０６）、空海が唐から茶の種子を持ち帰り、室生（今の宇陀市榛原赤埴）に種を蒔き、製法を伝えたことに始まるといわれています。また、唐から持ち帰ったという茶臼は佛隆寺（榛原赤埴）に保存されています。 主に大和高原で作られるお茶は品質の良い煎茶（日光を遮らずに栽培し、茶葉を蒸して揉みながら乾燥させた緑茶）です。
け		けまりぎょうじ かまたりまつる たんざんじんじゃ	**蹴鞠行事鎌足祀る談山神社** 談山神社は藤原鎌足を祭神とします。法興寺（今の飛鳥寺）の蹴鞠会において中大兄皇子（のちの天智天皇）と中臣鎌足（のちの藤原鎌足）が出会い、その後、多武峰で話し合いを行い、蘇我蝦夷・入鹿の親子を討ち滅ぼし、「大化の改新」を行いました。 話し合いの地とされるところにある談山神社で４月と１１月に蹴鞠行事が行われています。 神社の境内にある木造十三重塔は世界唯一のものです。
こ		こうふくじ ごじゅうのとうを うつす さるさわいけ	**興福寺五重塔を映す猿沢池** 猿沢池は、周囲約３００㍍の興福寺の放生池（とらえた魚などを放すための池）で、すでに天平時代に、仏花を栽培するための興福寺の花園の中にありました。興福寺の境内の南に三条大路をはさんであり、池には五重塔（国宝）が映っています。 仲秋の名月の日に行われる采女祭は有名で、池に管弦船を浮かべて音楽を演奏します。

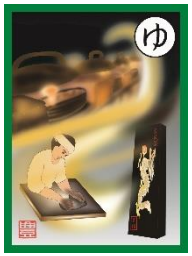
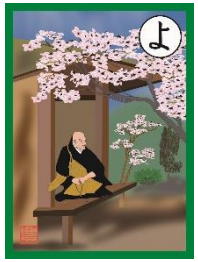
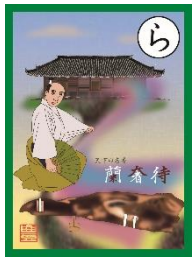
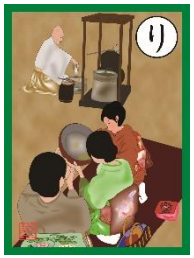
さ		さいこのれきししょ こじきのへんじゃ おおのやすまろ	**最古の歴史書古事記の編者太安万侶** 『古事記』は日本で一番古い歴史書で、その初めに、天武天皇の命令で稗田阿礼が暗誦した皇室の記録と伝承を和銅５年(７１２)に太安万侶が書き記して、３巻にまとめたと書かれています。 昭和５４年(１９７９)に大和高原の田原地区の茶畑で火葬墓が見つかり、墓誌が発見され、古事記の編者と知られていた太安万侶の実在が確認されました。
し		しょだい じんむてんのうまつる かしはらじんぐう	**初代神武天皇祀る橿原神宮** 橿原神宮の祭神は神武天皇と媛蹈鞴五十鈴媛皇后です。神武天皇は初代天皇の位につき、神日本磐余彦火火出見天皇ともいわれています。　『日本書紀』に神武天皇が橿原宮で即位したと書かれてあり、それを根拠にして、明治２３年(１８９０)に神社の建物が建てられ、橿原神宮の名前が天皇から下され旧官幣大社(最も格式が高い神社)に列せられました。本殿は京都御所の賢所を移築したものです。
す		すいかのたね ならがせいさん にほんいち	**西瓜の種奈良が生産日本一** 奈良県は全国で最も早く西瓜の品種改良を盛んに行い、果肉が甘くて皮が丈夫な運搬に向いている品種の開発に成功しました。 昭和の高度成長期に日本各地で西瓜が作られるようになり、奈良の西瓜生産は衰えましたが、西瓜の種は品種改良を行い優れた西瓜の系統を引き継いで、全国で生産される西瓜の種の８割以上が奈良県で作られています。
せ		せかいさいこの もくぞうけんちく ほうりゅうじ	**世界最古の木造建築法隆寺** 推古天皇１５年(６０７)に完成した伽藍(お寺の建物)は、天智天皇９年(６７０)に全焼しましたが、西院伽藍は和銅４年(７１１)までに再建され、東院は天平１１年(７３９)に僧行信が聖徳太子の斑鳩宮跡に夢殿(国宝)を建てました。 国宝の中門・回廊・金堂・五重塔は再建当初の建築物です。
そ		そがのうまこの はかとつたわる いしぶたい	**蘇我馬子の墓と伝わる石舞台** 石舞台は早くから墳丘の盛土が流出し、石室が露出したため「石舞台」と呼ばれるようになりました。 石舞台は一辺約５０㍍の方墳(方形の墓)です。内部は花崗岩の巨石を組み上げた横穴式石室で、玄室(棺を納める部屋)と羨道(玄室に通じる道)とからできています。石室の形態などから７世紀前半に造られたものと考えられ、蘇我馬子の墓の可能性が高いものです。

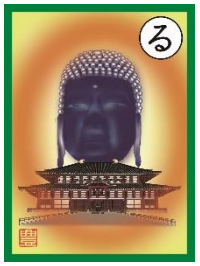
た		たかやまは ちゃせんのせいさん にほんいち	**高山は茶筌の生産日本一** 生駒市高山町は、茶筌の里として知られています。正徳６年(１７１６)、京都所司代から高山の１３名が「高山茶筌師」として苗字帯刀が許されました。 茶筌は、茶を点てる竹製の点前道具の一つで、高山町は日本の茶筌の生産量の約９割を占めています。
ち		ちゅうじょうひめ ゆかりの たいまでらと せっこうじ	**中将姫ゆかりの當麻寺と石光寺** 中将姫は右大臣藤原豊成の娘で、聖武天皇の時代(７２４年～７４９年)に中将姫が石光寺の境内にある井戸で蓮糸を染め、當麻寺本尊の蓮糸曼荼羅を織ったという伝説があります。　石光寺は「染寺」ともいわれ、寺の井戸は「染の井」といわれています。當麻寺では毎年５月１４日(２０１９年以降は４月１４日に行われる予定)に中将姫が来迎仏に導かれる様子を演じる練供養会式が行われています。
つ		ついじべい しほうをめぐる へいじょうきゅう	**築地塀四方をめぐる平城宮** 平城京は和銅３年(７１０)元明天皇から延暦３年(７８４)桓武天皇まで存続した都です。平城京の北部中央に平城宮があり、約１㌔四方の区画の外周を築地塀(築地大垣)がめぐっていました。 平城宮跡は、平成１０年(１９９８)に「古都奈良の文化財」として東大寺などとともに世界遺産に登録されました。平城宮跡では第一次大極殿や朱雀門などが復元されています。
て		てらのやねがわら ぎょうきぶきの がんごうじ	**寺の屋根瓦行基葺きの元興寺** 元興寺は、蘇我馬子が推古天皇４年(５９６)に飛鳥に建てた法興寺(今の飛鳥寺)が平城京遷都とともに養老２年(７１８)に元興寺の名で新たに建てられたお寺です。室町時代と江戸時代にあった火災で伽藍(寺の建物)の大半が焼失し、現在は中院町の極楽院と称された元興寺と境内に塔跡が残る芝新屋町の元興寺に分かれています。 中院町の元興寺の本堂(国宝)と禅室(国宝)の屋根の一部に飛鳥時代の瓦が行基葺き(様式)で残っています。
と		とうのそう がんじんたてた とうしょうだいじ	**唐の僧鑑真建てた唐招提寺** 唐招提寺は、聖武天皇の招きにより唐から来た鑑真和上が天平宝字３年(７５９)に新田部親王旧宅に律宗の道場を開いたことに始まります。御影堂には鑑真和上坐像(国宝)をまつっています。建築では、代表的な天平建築である金堂(国宝)や平城宮の東朝集殿を移築改造した講堂(国宝)などがあります。鎌倉時代に寺を再び盛んにした覚盛上人を偲んで毎年５月１９日に行われる鼓楼(国宝)からの「うちわまき」がよく知られています。

な		ならのしか かすがたいしゃの かみのおつかい	**奈良の鹿春日大社の神のお使い** 奈良の鹿は、春日大社を最初にまつるにあたって、茨城県の鹿島神宮から春日大明神が鹿に乗って来られたという説話から神鹿として守られてきました。 奈良公園の鹿は国の天然記念物に指定されている野生動物です。１０月には牡鹿の角で突かれる危険を防止するために江戸時代から続く鹿の角きりが行われています。
に		にがつどう はるをつげる おみずとり	**二月堂春を告げるお水取り** お水取りは、天平勝宝４年(７５２)、東大寺を開いた良弁僧正の弟子の実忠によって始められたと伝えられています。　二月堂(国宝)の本尊十一面観音に、東大寺のお坊さんが人々にかわって罪を懺悔して国家の安泰と万民が豊かに暮らせるように祈る法要(修二会)です。「お水取り」や「お松明」の名で知られ、奈良の春を告げる代表的行事です。
ぬ		ぬかたのおおきみ めぐるあらそい やまとさんざん	**額田王めぐる争い大和三山** 大和盆地南部(橿原市)に点在する天香久山、畝傍山、耳成山の三つの山を大和三山と呼びます。 『万葉集』では中大兄皇子(のちの天智天皇)が「香具山は　畝火ををしと　耳成と　相あらそひき神代より　かくにあるらし　古昔も　然にあれこそ　うつせみも　嬬をあらそふらしき」と歌っています。 大和三山が神代に恋争いをした歌ですが、中大兄皇子と弟の大海人皇子の額田王をめぐる恋争いを大和三山になぞった歌ともいわれています。
ね		ねんごうは たいかではじまる にほんこく	**年号は大化で始まる日本国** 『日本書紀』によると、「皇極天皇の４年(６４５)を改めて大化元年とす」と書かれてあり、大化は日本最初の年号となりました。 中大兄皇子(のちの天智天皇)や中臣鎌足(のちの藤原鎌足)らが蘇我入鹿を暗殺し、蘇我氏を滅ぼした乙巳の変の直後に年号制定が行われました。その後、大化の改新へと続いていきます。
の		のうがくの はじまり やまとさるがくよざ	**能楽の始まり大和猿楽四座** 古くから興福寺や春日大社などの神事に奉仕することを職務とし、外山座、坂戸座、円満井座、結崎座の四座が大和四座といわれました。 室町時代に入って結崎座の観阿弥・世阿弥父子が足利将軍家に重んじられて猿楽を現在の能楽とほぼ同じ芸能に発展させています。以後、豊臣氏・徳川氏にも重んじられ、外山座は宝生流、坂戸座は金剛流、円満井座は金春流、結崎座は観世流となり、現在まで続いています。

は		はなのはせでら ぶたいづくりと のぼりろう	**花の長谷寺舞台造りと登廊** 長谷寺の本堂は、徳川家光の寄進によって慶安３年（１６５０）に再建された舞台造りといわれるもので国宝になっています。 仁王門から本堂に至る全長２００㍍ほどの登廊と梁に吊るされた球形の釣灯籠も有名です。登廊に沿って咲くボタンは見ごたえがあります。四季それぞれに花が咲いている花の寺です。 平安時代には観音信仰が盛んになるにつれ京都からの参詣者も増え、貴族の女性も多く参詣しました。
ひ		ひみこのはか ともいわれる はしはかこふん	**卑弥呼の墓ともいわれる箸墓古墳** 桜井市箸中にある箸墓古墳は、現在は宮内庁によって第七代孝霊天皇の皇女倭迹迹日百襲姫命の大市墓として管理されていますが、邪馬台国の女王卑弥呼の墓という説もあり、わが国において最も有名な古墳の一つです。 墓の形式は前方後円墳ですが、前方部の先端がバチ状に広がっており、古い形状を示すとされています。
ふ		ふじわらきょう にほんはつの ほんかくとじょう	**藤原京日本初の本格都城** 藤原京は、持統天皇が持統天皇８年（６９４）に飛鳥浄御原宮から遷都し、文武天皇を経て、元明天皇が平城京へ移る和銅３年（７１０）までの都です。藤原京は道路に囲まれた区画をもつわが国初の本格的な都です。 宮の中心となる建物群は、礎石建ち、丹(朱)塗り柱、瓦葺きで、日本最初の中国式宮殿建築として建っていたと考えられています。
へ		へきがでしられる たかまつづかと きとらこふん	**壁画で知られる高松塚とキトラ古墳** 明日香村にある高松塚古墳とキトラ古墳は、どちらも円墳で横口式石槨があり、石槨内面の壁画が有名です。 高松塚古墳には男女人物像が１６人も描かれており、飛鳥時代後半の服装を知る上でも貴重な史料です。キトラ古墳には天文図と日月像、各壁には四神図が描かれ、さらに獣頭人身像が描かれていたものと考えられています。
ほ		ほっけじは こうみょうこうごう ゆかりのあまでら	**法華寺は光明皇后ゆかりの尼寺** 法華寺の正式名は法華滅罪之寺といいます。藤原不比等の旧邸宅を光明子が皇后宮とし、天平１７年（７４５）に宮寺となりました。総国分尼寺として全国の国分尼寺をまとめていました。 平安時代末期から室町時代・戦国時代にわたって建物は壊れていましたが、淀君が奉行の片桐且元に建てさせた本堂・南門・鐘楼は現存していて重要文化財になっています。

ま		まんようしゅう ならうまれの さいこのかしゅう	**万葉集奈良生まれの最古の歌集** 『万葉集』は、７世紀後半から８世紀後半にかけてまとめられた日本最古の和歌集です。 天皇、貴族から下級官人、防人などさまざまな身分の人が詠んだ歌が２０巻・４５１６首あり、大伴家持が編者と考えられています。成立は天平宝字３年(７５９)以後とみられています。 額田王、柿本人麻呂、山部赤人・山上憶良・大伴家持などの歌があります。
み		みわやまは おおみわじんじゃの ごしんたい	**三輪山は大神神社のご神体** 三輪山は、桜井市三輪の東部にある円錐形の山で、標高は４６７㍍です。『古事記』や『日本書紀』には三諸山・御諸山などとも記されています。 山麓に大神神社がありますが、祭神は三輪山をご神体とする大物主神で、三輪山自体がご神体であるため大神神社には本殿はありません。
む		むろうじは にょにんこうやの たたずまい	**室生寺は女人高野のたたずまい** 元禄１１年(１６９８)に五代将軍徳川綱吉の母、桂昌院が室生寺を興福寺から離し、新義真言宗豊山派の道場として以来、室生寺の弘法大師信仰が高まり、女人高野の霊場として発展しました。 石積みの階段の鎧坂の両側で春に咲くしゃくなげは有名で、緑の木立に囲まれて建っている可憐な木塔の五重塔(国宝)も美しい佇まいを見せ、静かな風情を求めて今も多くの参詣者が訪れています。
め		めらめらと ほのおがはしる わかくさやまやき	**めらめらと炎が走る若草山焼き** 奈良市北東にある若草山は標高３４２㍍です。中世に春日大社、興福寺、東大寺の境界争いに端を発するといわれ、毎年冬に行われる「山焼き」の起源という説もあります。山焼きが始まる前には大花火が打ち上げられ、全山が炎に包まれる野焼き行事です。
も		もこしあり ろくじゅうにみえる やくしじとうとう	**裳階あり六重に見える薬師寺東塔** 天平２年(７３０)建立の薬師寺の東塔(国宝)は各階に裳階(本来の屋根の下につけたひさしのようなもの)がめぐり、六層に見える三重塔で、日本の古代建築を代表する古い建築物であるとともに、最も美しい木塔であるといわれています。 飛天の透かしをもつ相輪(仏塔の最上部にある装飾部分)の水煙も芸術的価値が高いものです。

や		やまとは くにのまほろばと うたった やまとたけるのみこと	**大和は国のまほろばとうたった倭建命** 「大和は 国のまほろば たたなづく青垣 山ごもれる 大和しうるはし」は、『古事記』に倭建命の歌として伝えられている歌です。 歌の意味は、「大和は国の中で一番良いところである。幾重にもかさなりあった青い垣根のような山やまにかこまれた大和はほんとうに美しくて立派なところである。」ということです。
ゆ		ゆえんぼく すすをかためた ならのすみ	**油煙墨煤をかためた奈良の墨** 奈良墨は、室町時代に興福寺の二諦坊で、たまった灯明の煤を集めた油煙墨が起源といわれています。 当時は貴重で「油煙」と呼び、贈答用にしました。織田信長に墨百挺を献上した記録もあります。 『日本書紀』には、推古天皇１８年(６１０)に高句麗僧の曇徴が、紙墨(紙と墨)の製法を日本に伝えたと書かれています。
よ		よしのやま さくらのめいしょと さいぎょうほうし	**吉野山 桜の名所と西行法師** 吉野山は大峰山脈の北端にある山で、桜の名所として知られ全山３万本ともいわれています。 「下千本」「中千本」「上千本」「奥千本」の呼び名は、一地点から千本の桜が一望できるという意味です。 西行法師は平安時代末期に鳥羽院に仕えましたが、出家し諸国を行脚しました。吉野山には３年ほどひっそりと住み、吉野の桜を愛し歌いました。「奥千本」といわれる付近に、小さな庵の西行庵があります。
ら		らんじゃたい てんかいちの めいこうおさめる しょうそういん	**蘭奢待 天下一の名香収める正倉院** 蘭奢待は、東大寺正倉院(国宝)に収納されている香木で天下第一の名香といわれています。 正倉院宝物目録での名は黄熟香で、「蘭奢待」という名は、その文字の中に"東・大・寺"の名を隠した呼び名です。紅沈香と並び、権力者にとって非常に重宝された香木です。
り		りょうてで まわしのみする さいだいじ おおちゃもり	**両手で廻し飲みする 西大寺大茶盛** 西大寺は奈良時代に称徳天皇が建てたお寺です。平安時代には多くの建物が焼失して荒れていましたが、鎌倉時代に叡尊というお坊さんが再び元のように盛んにしました。 大茶盛は、その叡尊が祈祷のあとに湯茶をふるまったのが始まりとされ、西大寺のお坊さんがたてた抹茶を直径３０～４０㌢の大きな茶碗で廻し飲みします。

る		るしゃなぶつは とうだいじの だいぶつさん	**盧舎那仏は東大寺の大仏さん** 大仏さんという名で親しまれている東大寺大仏殿の本尊は、正式には毘盧舎那仏(国宝)といいます。「三年八度」といわれ、三年間に下から八段に分けて造られたとされています。天平勝宝４年(７５２)４月９日に開眼供養会（大仏に魂を入れる）が行われました。　現在に至るまでには地震や何度も戦乱にあっており、私たちが目にする頭部と上半身の大部分は江戸時代に再興された時のものです。
れ		れいきに さらしてつくる みわそうめん	**冷気に晒して作る三輪そうめん** 奈良時代に中国から伝えられたそうめんは、巻向川と初瀬川にはさまれた三輪山のふもとで作られています。かつては巻向川にはいくつもの水車が回り、小麦をひいていました。 夏の食べ物であるそうめんは寒い時期に作られ、寒風に晒されるそうめん干しは真冬の風物詩です。
ろ		ろまんある さいこのこどう やまのべのみち	**ロマンある最古の古道山の辺の道** 山の辺の道は、奈良盆地の南東にある三輪山のふもとから北東部の春日山のふもとまで、標高７０㍍前後の盆地の東の縁を山々の裾を縫うように南北に通じる古道で、歴史に登場する道路のうちで最古の道といわれています。 沿道には崇神天皇陵や景行天皇陵などの陵墓や古墳や古い寺社も多くあります。
わ		わかみやおんまつり いきたにほんの げいのうし	**若宮おん祭 生きた日本の芸能史** 保延元年(１１３５)に春日大社の若宮神をまつる建物が建てられ、翌年から若宮神の例祭のおん祭が始まりました。神社の由来を書いた資料では、関白藤原忠通が、すべての穀物が豊かに実ることと国民が平穏であることを祈願して始めたとされています。　おん祭は、１２月１５日から１８日にかけて、神と人の御旅所への移動とそこでの華麗なお祭りが行われます。ここで数多くの歴史的な芸能が奉納されることから「生きた芸能史」ともいわれています。

※解説文の内容は、主に『奈良まほろばソムリエ検定　公式テキストブック』を参考にしています。

2019.12.12